

【短編・体験版】敵の拠点で捕まってしまった私は触手に全身を弄ばれる。

「……。」

「……はっ！？」

僕が目を覚ますと、そこは見知らぬ地下室のような場所。

それも、両手両足を身体の後ろに折りたたむ形で嚴重に拘束された状態で床に転がされていたのだ。

いや、今は僕というよりは私と言った方がいいだろうか。

なにせ、今回の任務は「女だけで構成された悪の集団の拠点への潜入」ということもあり、

怪しまれる確率を下げるために一時的に女の子の姿になっているからだ。

潜入中に入った部屋に、何やら眠くなるような薬を仕掛けられていたようで意識を失ってしまい…

気付いたらここにいたという形である。

——こつり、こつり、こつり。

階段を下りてくる足音が聞こえてきて、数秒後に黒い軍服を着た金髪の女が現れる。

「ふふん、お目覚めのようだね？」

女はそう言うと、拘束されている私を見下ろして不穏な笑みを浮かべた。

「ぐっ…きみか、ここの組織のリーダーは…。」

これから自分がどうなるのかという不安を感じつつ、私は彼女に尋ねてみる。

「まあ、そんな感じだな。

私の名前は…そうだな、ここではサクヤと呼んでくれたらいいさ。」

サクヤと名乗ったその女は、意外なことに敵である私に対しても丁寧に対応する。

「私と君は敵対する関係だが、せっかく私たちのアジトに来てくれたんだ、手荒な真似はしないさ。」

「そうなのかい？…でも、それならなぜこんな拘束をしているんだい？」

単刀直入に、私はサクヤに尋ねる。

「なぜ、って…ちょっと試したいことがあるのさ。

せっかく来てくれた客人を何もせずに帰してしまうのも勿体ないからね。

よく見ると君、敵ながら可愛い見た目をしているね？これはいい展開になりそうだ…。」

サクヤはそう言うと、拘束されている私を抱きかかえて隣の部屋へと移動する。

その部屋にあったのは、ちょっと不気味な雰囲気を漂わせている触手生物だったのである。

「ふふふ…この際だし、たっぷり可愛がられてもらおうか…。」

「ひい、ひいひいっ！そんなもので一体私をどうするつもりなのお！？」

触手生物を見せつけられて、恐怖のあまり拘束された身体をばたばたと動かして抵抗する。

…だが、当然ながら無駄な抵抗に過ぎない。

「君のような頭のいい子ならこれからの展開は想像がつくだろうに…

まあ言ってしまうと、この触手の責めがどんなものなのか実験台になってもらう、と言ったところかな？

それじゃあ、早速だけどせいぜい楽しませてね？」

サクヤはそう言うと、拘束された私の身体を献上するかのように触手生物のすぐ近くに置いて、彼女自身は近くの椅子に座ってその様子を鑑賞し出したのだった。

「いやああああ～！来ないでえええ～！」

いただきますと言わんばかりに、身動きの出来ない私に迫りくる触手。

触手は服の隙間から私の身体の中に入り込み、粘液のようなものを身体に塗りつけてくる。

「その触手が出す粘液には軽度の催淫作用があるらしいよ？」

...それがどういう意味かは、言うまでもないよね...。」

ニヤニヤとした表情をしながら、触手に襲われる私を鑑賞するサクヤ。

「あっ、ああっ...あはあ.....っ！」

早くも粘液の効果が出てきたようで、身体が少し熱くなってきた。

触手は粘液をおおかた塗り終えたと判断したのか、今度は私の胸に向かってしゅるしゅると伸びてくる。

「や、やらあっ！いひやあああっ！」

泣き叫んでも、触手の責めが止まるわけではない。

私の叫びを無視して胸にへばりついてきた触手は、突然ぺろりと乳首を舌で舐めるかのような責めを繰り返してきたのだ。

【サンプルはここまでとなります。】

今作のサムネイルの作成では、

・みんちりえ「地下室」

・水の木(作者:瑞木)「立ち絵素材 軍服少女」

の素材を利用させていただきました。ありがとうございます♪